# 重要事項調査議員団（第四班）報告書

団長　矢野哲朗
同　郡司彰
同　風間昶
行　小野寺紀雄

参議院議員
同　八木哲
同　カ部義秋
第　ン民主党・国民
関　す る 社会保障と税の一体改革に関する特
平　成 十 年 調 査 月 日 に 経 過 した 国 会 の 会 期 を 二 十 日 間 延 長 し た 。
間　、 同 九 月 八 日 か ら 十 日 間 の 日 程 で ア ル ゼ ン チ ン 、 ブ ラ ジ ル 、 チ リ 及 び ペ ル ー の 中 南 米 諸 国 を 訪 問 する。

本　議　員　団　は　、　ス　リ　ラ　ン　カ　に　お　け　る　人　道　的　な　地　雷　除　去　活　動　に　関　する　日　本　の　支　援　を　強　化　する　ため　、　ス　リ　ラ　ン　カ　政　府　の　要　人　と　の　会　談　を　行　う　ため　、　次　の　日　程　で　ス　リ　ラ　ン　カ　を　訪　問　する。

八月二十二日（水）
東京発（タイ経由）
八月二十三日（木）
コロンボ着
・ナショナル・ビーチ・ホテル（ＪＩＣＡ専門家及び懇談）
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）派遣専門家との懇談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）代表との会談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）評議員との会談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）州・大臣との会談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）大臣との懇談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）教育表彰会談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）代表領事との会談
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）大統領と会食
・ＪＩＣＡ（ＪＩＣＡＶ）大臣との会談
八月二十四日（金）
・モラゴダ観光大臣との会談
・コロンボ銀行（ＡＤＢ）
・コロンボ国際空港改善プロジェクト（ＡＤＢ）
・コロンボ発（シンガポール経由）
八月二十五日（土）
東京着

## 一　始めに

本院は、参議院改革の協議会の提言を受けて、平成十六年度以降、ＯＤＡ予算の効率的な活用に関する観点から、事項調査等に重点を置く。

率的運用に資するため、新たにＯＤＡに関する専門の調査団を派遣してきたところである。

これらに加えて、平成十八年一月召集の第百六十四回国会（常会）において、政府開発援助等に関する特別委員会（以下、「ＯＤＡ特別委員会」という。）が設置された。

ＯＤＡ特別委員会は、対政府質疑及び有識者との質疑を行うだけでなく、ＯＤＡ調査派遣団の参加議員から意見を聴取し、自由質疑を行い、また、訪日した外国要人との意見交換を積極的に行っている。

今回のスリランカ民主社会主義共和国への派遣は、こうした本院のＯＤＡに関する取組を踏まえたものである。同国に対する各国ＯＤＡのうち、我が国のＯＤＡが第一位を占めるが、その運用が円滑かつ効率的なものとなっているかを、また、同国の和平構築にどのように寄与しているかを調査することとし、政府首脳との会談を通じて、訪問国の現状・要望等を政治レベルで把握し、本院における今後の取組の参考に資するために実施されたものである。

議員団は、今回の派遣が成果の大きなものとなるよう出発に先立ち、まずスリランカに関する現状及び歴史等について外務省担当者から説明を聴取し、次にＲ・ウヤンゴダ在京スリランカ大使から直接、同国の現状と課題について意見交換を行う機会を得た。これらに加え、現地に着いた当日の朝、荒木喜代志大使ほか日本大使館担当者から内政等に関する最新の状況について説明を聴取し、意見交換を行った。

さらに帰国後もウヤンゴダ大使並びにＳ・シマサクン在京タイ大使に対し、今回の派遣の概要報告を行い、スリランカ及びタイを巡る東南アジアの情勢に関する意見交換を行う機会が得られた。

なお、Ｍ・ラージャパクサ・スリランカ大統領の訪日が実現し、ＯＤＡ特別委員会は昨年十二月十日、同大統領から意見を聴取し、熱心な意見交換を行った。

以下、スリランカの概況に触れた後、同国の政府要人との会談及び視察先での説明聴取の概要を

報告する（諸般のデータは派遣時点のものである）。

## 二　スリランカの概況

### （一）内政

スリランカは、共和制を採用し、任期六年の二百二十五人の定員からなる一院制の議会を有する。選挙制度は、中選挙区比例代表制であり、主な政党としては、連立与党（百二十一議席）の中心であるスリランカ自由党（ＳＬＦＰ・五十八議席）、最大野党の統一国民党（ＵＮＰ・四十三議席）のほか、民族主義政党である人民解放戦線（ＪＶＰ・三十九議席）がある。

Ｍ・ラージャパクサ大統領は与党ＳＬＦＰに属し、当初、少数与党として政権を担っていた。二〇〇六年十月にＳＬＦＰとＵＮＰの政策合意がなされた後、昨年一月、政策合意の具体的な協力が進まないことを理由にＵＮＰの議員十八名とスリランカ・ムスリム会議（ＳＬＭＣ）の議員六名が政府側にくら替えした結果、与党は、過半数の百十三議席を超える議席を確保する結果となった。

### （二）和平プロセス

スリランカは、国内の民族紛争が約二十年間続き、なかなか終わらないというのが実情である。同国の和平プロセスについて概観してみると、一九四八年の独立後、シンハラ人優遇策にタミル人が反発したことから国内に紛争が起こり、一九八三年の大騒擾を機に、政府と、北・東部の分離独立を目指すタミル・イーラム解放の虎（ＬＴＴＥ）の間で本格的な戦闘に発展した。この民族紛争によりこれまでに六万五千人以上が犠牲になったと伝えられている。

外国による和平の仲介は、隣国インドによる仲介の失敗を経て、第三国のノルウェーが二〇〇〇年、和平の仲介を開始し、二〇〇二年二月に、スリランカ政府とＬＴＴＥは一旦停戦に合意した。

我が国は、この停戦合意を受け、明石康元国連事務次長を「スリランカの平和構築及び復旧・復興に関する日本政府代表」に任命し、定期的にス

リランカに派遣し、二〇〇三年三月、箱根において第六回和平交渉を開催した。同年六月には「スリランカ復興に関する東京会議」を開催するなど、和平に関する積極的な支援を行ってきた。

しかし、二〇〇六年七月に東部での戦闘が激化し、大規模な衝突に至り、停戦合意崩壊の危機に陥った。同年十月、スリランカ政府とＬＴＴＥの直接協議が再開されたが、和平案はまとまらず、協議が終了することとなった。

その後もＬＴＴＥはテロ等を継続し、昨年一月、政府軍は、東部の要衝ワーカライを奪取し、事実上、東部をほぼ制圧した。そのため、停戦合意は事実上崩壊したと考えられている。しかも、この東部制圧の戦闘で二十万人を超える国内難民が発生した。

このような紛争が打ち続くにもかかわらず、現在もラージャパクサ大統領は、二〇〇六年一月に設置した全政党代表者委員会（ＡＰＲＣ）において民族問題解決のための和平案の策定を進めている。

（三）スリランカへの我が国のＯＤＡの基本的考え方

スリランカへの我が国のＯＤＡは、一九八六年以降、同国では第一位を占める（二〇〇三年開発援助委員会（ＤＡＣ）加盟国合計で第一位が日本で六十三パーセント、第二位がノルウェーで十三パーセント、第三位がオランダで十一パーセント）。

我が国は一九六五年から、より積極的な支援を展開してきており、また、ＯＤＡ大綱（二〇〇三年八月）の重点課題である「平和構築」の趣旨を踏まえて和平プロセスを支援してきた。

スリランカに対する国別のＯＤＡについては、二〇〇四年四月に国別援助計画を策定し、その中で重点分野として、「平和の定着と復興支援」、「中・長期開発ビジョンに沿った支援」の二点が挙げられている。前者はまさに和平に直結するものであり、平和構築のための「北・東部の基本社会インフラ整備への支援」等を行いつつ、後者では貧困削減に関して、保健、教育、人材育成等の

基礎生活分野から、かんがい、道路、電力、港湾等に至るまで支援している。

（四）スリランカへの有償資金協力

二〇〇六年度では三件、総額約三百九十二億円であった。そのうち、「大コロンボ圏都市交通整備計画」が最大で、約二百十九億円をかけ、コロンボ郊外に外郭環状道路等を整備するものである。同年度までの円借款の累積総額は約七千二百十三億円に上る（交換公文ベース）。

（五）スリランカへの無償資金協力

二〇〇六年度で総額約二十五億円であった。同年度までの実績総額では、約千八百億円に上る（交換公文ベース）。二〇〇六年度の主な案件では、セクター・プログラム無償として約十二億円の拠出が最大であり、スリランカ政府の経済構造改革を支援する。また、昨年八月、「気象及び防災情報ネットワーク改善計画」及び「シーギリヤ博物館展示機材整備計画」への無償資金協力の交換公文を署名している。

（六）技術協力

スリランカへの技術協力は、二〇〇五年度で約三十億円が実績である（ＪＩＣＡ経費ベース）。同年度までの実績総額は、約五百六十二億円に上る。人員も同年度までの累積実績で、研修員受入約六千四百人、専門家派遣約千二百人、ＪＯＣＶ派遣は約六百七十人に上る。昨年八月初め現在で、シニア・ボランティアを含め、五十三名のＪＯＣＶ隊員が活動中である。

（七）津波復興支援

二〇〇四年十二月、スリランカを襲った津波により、三万人以上が死亡、約百万人が被災した。我が国は、二〇〇五年一月に八十億円のノン・プロジェクト無償資金協力を行い、幅広い復旧・復興支援を行った。また、津波被災からの中長期的な復興支援として、約百億円の円借款（二〇〇五年六月交換公文署名「スリランカ津波被災地域復興

計画」）を行い、経済社会基本インフラの整備及び小企業の経済活動の再開・活性化の支援を行っている。

三　マラダーナ短期工科大学視察

本派遣の最初の視察は八月二十三日、マラダーナ短期工科大学において始まり、議員団は、同短大の関係者から大歓迎を受けた。

スリランカ全土に存在する技能短大（Technical College）三十六校では、年間約一万七千名に職業訓練を実施しているが、産業界のニーズに合致した訓練になっておらず、その必要とされる人材の供給ができていないことが指摘されてきた。

このような問題を解決するため、スリランカ政府とＪＩＣＡは、「技術教育訓練再編整備計画プロジェクト」を実施することとした。この技術協力プロジェクトは、二〇〇五年七月から五年間、総額約六億円の予算をかけ、コロンボ市にある同短大をモデル校とし、メカトロニクス、情報通信及び金属加工の三分野に関してディプロマ（準学士）レベルのモデルコースの立ち上げを支援することである。

我が国からはこのプロジェクトのために、日本人専門家の派遣、機材の供与及び研修員受入を実施しており、その設立・運営手法が、スリランカ側によって、他の技術短大の設立・運営にいかされていくことが期待されている。

同大学において、Ｎ・ウィジェナヤケ校長の案内で、実習作業及び講義の視察を行った。議員団は、講師及び学生らと直接触れあう機会があり、矢野団長から、「この技術協力は、我が国とスリランカの友情をより強くするために行われたもので、どうかスリランカの産業を発展させるため、この短大における訓練をしっかりと行い、その経験をいかしていただきたい。また我が国のＯＤＡが貴国の発展に役立っていること、そのことをお友達等にお伝えいただきたい。その結果、二国間の外交関係強化にストレートに結びつくものと考えます」との激励のあいさつがなされた。

なお、議員団はこの視察の後、昼食をとりながら、スリランカで活躍するＪＩＣＡ派遣専門家及びＪＯＣＶ代表との懇談を行った。懇談の中で、議員団より、スリランカでの苦労、スリランカ国民の親日の度合い、スリランカの子供たちの受験競争等についての質問がなされた。

最後に風間議員より、ＪＩＣＡ派遣専門家及びＪＯＣＶ代表のスリランカにおける活躍に敬意を表するとともに、激励の言葉が伝えられた。

四　デ・シルバ保健大臣との会談

議員団は、ＳＬＦＰ副総裁でもあるニマル・シリパーラ・デ・シルバ保健大臣を表敬訪問した。同大臣は、スリランカ政府の保健部門を中心に要職を歴任し、世界保健機関（ＷＨＯ）の各種委員会の議長も務めるなど、保健分野に大変詳しい。スリランカの和平に関しても、ラージャパクサ大統領により政府側代表団長に任命され、二〇〇六年二月のジュネーブでの停戦合意の実施に関する協議に出席した経験を持つ。

冒頭、矢野団長は、郡司、風間両派遣議員を紹介した後、我が国の経済協力が円滑に実施されているかどうかを確認するという訪問の目的について述べた。これに対し同大臣から、「今回の訪問を歓迎したい。日本の支援によって、数多くの案件が実施され、スリランカ国民に寄与していることを確認していただければと思う」旨の発言があった。

次に矢野団長から、「明二十四日午前には血液センターを訪問する予定である」旨述べたところ、同大臣は、「所掌する保健分野においても、日本より多額の支援を頂いており、これまでにＮＢＴＳのみならず看護婦センター等の設立等多くの支援を頂いており、感謝している」旨の発言があった。

矢野団長より、「閣下におかれては、昨年秋のＷＨＯ事務局長選挙において、尾身候補（尾身茂・ＷＨＯ西太平洋地域事務局長）に対する一貫した支持を頂き感謝している。残念な結果となったが、スリランカが国際場裏において常に日本を支持し

ていることに感謝したい」旨述べたところ、同大臣より、「三回の投票すべてにおいて尾身候補を支持した。残念な結果となったのは、アフリカの国々が一貫して日本を支持しなかった点だと思っている」旨の発言があった。さらに、矢野団長より、「閣下に対しては、ＷＨＯ事務局長選挙協力の関係もあり、日本の厚生労働省が訪日を打診していると聞いているので、是非とも早期に訪日していただきたい」旨述べたところ、同大臣より、「個人的にはそうしたいと思っているが、議会において与党が過半数を有しているものの種々の国会対策に忙殺されており、すぐには時間が取れない。また、保健大臣としても、先週、第八回アジア大洋州地域エイズ会議（ＩＣＡＡＰ）を主催したが、こうした国際会議も開催することが多いので、日程を確保することが難しい状況が続いている。さらに、十一月七日には予算審議が開始するので、できれば十月中のいずれかの段階で訪日したいと考えている」旨の発言があった。

矢野団長より、「訪日された際には、是非個別に会談したいと思う」旨述べたところ、同大臣より「そうしたい」との回答がなされた。

特にスリランカの和平プロセスについては、矢野団長より、「閣下は、これまでのＬＴＴＥとの交渉において、政府代表団長を務められていることから、和平の分野においても知見を有すると承知している。閣下は今後の和平の展開をどのように見ておられるのか」旨述べたところ、同大臣は、「現在、ＡＰＲＣにおいて、民族問題の最終的解決に向けた提案が策定中であるが、あと一週間以内に最終案がまとまることになるかと思う。しかしながら、最終案がまとまったとしても、ＬＴＴＥがこれを受け入れる可能性はほとんどないように思われる。なぜなら、過去の交渉におけるＬＴＴＥの態度は非常に無礼であるとともに、平和的に問題を解決しようという意志が見られなかったためである。しかしながら、政府は、いつでもどこでもＬＴＴＥと問題の解決について話し合う用意はできているし、その強い意志も有している。我々は問題を軍事的ではなく、平和的、つまり話

てきて千そう守はは忘れては
上げは、二起こ国民を国として、やを含め外交団も
申し政府としてテロを自国の一環とし対策の一環とし
常々政府とし起こ国民を国として、やはＬＴＴＥは
と常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
いたいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
って解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
よって解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
によって解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
いによって解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
ってによって解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
りってによって解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
よりってによって解決したいと常々申し上げてきて千そう守はＬＴＴＥは
りよ

とも引き続き努力してほしい」旨強く主張したところ、同大臣より、「政府としてもできる限りの努力をしているし、今後も継続していくつもりである。なお、停戦合意に関して言えば、ＬＴＴＥは六千回以上も停戦合意違反をしており、彼等がそもそも停戦を遵守するつもりがないのが問題である」旨の発言があった。

最後に矢野団長より、「いずれにしても問題の解決を平和裏に図るにはＬＴＴＥを交渉のテーブルに引きずり出すことが必要である。ＡＰＲＣにしても、できるだけ早期に南部の意見をまとめて最終案を提示していただきたい。政府として、和平に向けた明確なロードマップを示すことが必要であろう」との指摘がなされ、同大臣より、「その通りである。自分も微力ながら努力したい」旨の発言があった。

## 五　ボーゴラガマ外務大臣との会談

ローヒタ・ボーゴラガマ外相はかつて、野党の統一国民党（ＵＮＰ）の所属議員であった。国営企業の社長に就任した経験があり、また、産業大臣に任命されたこともあり、産業関係の要職を歴任してきた。

スリランカの和平については、二〇〇六年行われた政府とＬＴＴＥの直接交渉では、政府側代表団報道官を務めた経験を持つ。

会談の冒頭、我が国とスリランカとの二国間関係（経済協力を含む）について、同大臣より、「矢野団長、郡司議員、風間議員三名の参議院議員団のスリランカ訪問を歓迎したい。日本とスリランカは半世紀以上にわたって良好な関係を維持してきている。また、経済協力面では、今年だけでも三百九十億円以上にも及ぶ第三十八次円借款、約十二億円のノン・プロジェクト無償、約三億円の食糧増産援助（二ＫＲ支援）がなされているし、昨年の東部地域の戦闘により発生した国内避難民に対する支援も実施していただいている。また、約二億円のシーギリヤ博物館に対する文化無償資金の供与も決定いただいたと聞いている。日本の

スリランカに対する支援はこのような経済協力、文化、経済等あらゆる分野に及んでいるが、ここ数年では、和平プロセスの分野において、東京会議四共同議長の一員として、また明石政府代表の活動のみならず、独立国際有識者グループとして横田洋三中央大学大学院教授に活躍していただく等、積極的な支援を頂いており感謝している。さらに、国際場裏においても、今年よりスリランカはＡＲＦ（ＡＳＥＡＮ地域フォーラム）の二十七番目の加盟国となったが、スリランカ加盟に向けて日本の御尽力があったと承知しており、感謝したい。今年六月には外務大臣として日本を訪問し、麻生大臣との間で外相会談を実施し、両国関係が極めて強固であることを確認できる等極めて有意義な訪日であった。今年中には、ラージャパクサ大統領が日本の招待を受けて、訪日することになっており、この機会に是非ともこれまでのスリランカ日友好関係を確認するとともに、一層の関係強化を図りたいと考えている」旨発言があった。

矢野団長より、郡司、風間両派遣議員を紹介した後、今回の訪問の目的を述べ、「既にマラダーナ短期工科大学を視察するとともに、先ほどはデ・シルバ大臣から我が国の経済協力に対する感謝の言葉を頂いたところであり、我が国の経済協力に対する高い評価を得ていることに満足している」旨述べた。

また、矢野団長より、ＯＤＡ特別委員会の閉会中の審議について、「スリランカは南アジア地域の中でも民主主義が古くから存在し、日本と極めて近い価値観を有する重要な国である。また、現在も安倍総理がインドを訪問しているように、日本は南アジアを重視している。こうした中、大統領が今年中に訪日する予定であると聞いているので、大統領の訪日の機会に合わせて、自分としては、本院のＯＤＡ特別委員会の閉会中の審議という形で、スリランカへのＯＤＡについての審議をしたいと思っている。その際には是非、閣下等に右審議に出席していただきたいと思っている。そうすれば、スリランカに対するＯＤＡがいかにスリランカ国民に寄与しているか、効率的に用いられて

いるかが日本国民にも広く理解していただけるとともに、スリランカの和平についても日本国民の関心も集まることになろう」との発言があり、これに対し、同大臣は、「承知した。仮に大統領とともに訪日する際には、是非そのようにしたい」との発言があった。

矢野団長より、スリランカの和平プロセスについて、「和平問題については、政府としてＡＰＲＣプロセス等様々な努力をされていると承知しており、民族問題には長い歴史もあるので、一朝一夕には解決できないということも理解できる。だが、是非とも、大統領が訪日される際には、安倍総理に対して和平実現に向けたロードマップを示してほしい。日本としてはスリランカの平和実現に向けて更なる協力を惜しまないつもりである」旨述べた。

同大臣は、「和平プロセスを進めることで、国民に平和の配当を享受させなくてはならないことはよくわかっている。それと同時に、これまでＬＴＴＥが支配してきた地域に対し、民主主義と多元主義と基本的人権の尊重という概念を根付かせることが何よりも重要である。ＬＴＴＥは過去数十年にわたってファシストとも思える体制で、北・東部地域の住民を虐げてきた。特に、タミル人は偉大な指導者をことごとくＬＴＴＥによって殺害され、政治的な主張をする勢力を失ってしまった。

東部地域においては、政府軍の奮闘によって、ＬＴＴＥを同地域から駆逐することに成功し、これによって東部地域住民は初めて自由になり、政府としてもこうした住民の生活の底上げを図るべく更なる開発を実施しているところである。現在、政府はＡＰＲＣプロセスにおいて、穏健なタミル人が納得することのできるような権限委譲の最終案を策定しているところであり、大統領訪日の際には、是非明確なロードマップが示せるように引き続き努力していきたい。日本におかれては、和平について、スリランカの複雑な事情を踏まえた上で、適切なアドバイスを頂くとともに、政府側の努力を評価していただいており、感謝したい」

旨の発言があった。

矢野団長より、「確かにＬＴＴＥがこれまでしてきたことはテロリストそのものであるが、他方、スリランカに住むタミル人の多くに対してＬＴＴＥが暴力によって支配しているという事情はあるにせよ、ＬＴＴＥをタミル人の代表と見なしているのも事実であると思う。したがって、ＬＴＴＥとの交渉は必要不可欠であろう」との指摘がなされ、同大臣から、「我々はいつでもＬＴＴＥと交渉していいと思っているし、事実、過去数十年にわたって、ＬＴＴＥと交渉してきた。しかし、これを裏切るのはいつもＬＴＴＥであった。にもかかわらず、政府は現在においても、いつでもどこでも協議する用意がある旨をＬＴＴＥに伝達してきている。また、政府内にスリランカ和平プロセス調整事務局があり、和平仲介国のノルウェーや日本と連携しつつ、ＬＴＴＥとの交渉の機会を探っている。このように政府としては、交渉に向けて努力をしている。なお、ここで申し上げたいのは、スリランカの人口の中で約十五パーセントをタミル人が占めているが、タミル人の中の約五十五パーセントは北・東部地域ではない南部地域で生活している。南部地域で生活するタミル人は、シンハラ、ムスリムの他の民族と共存しており、ＬＴＴＥのような過激な意見は持っていない。さらに、政府の統治の在り方にも満足しているし、政府内にも多くのタミル人が大臣としてのみならず公務員としても働いている。このように政府は多くのタミル人とうまくやっているのである。しかしながら、我々は南部のタミル人のみを優遇するというのではなく、北・東部地域のタミル人に対しても支援の手を差しのべている」旨の発言があった。

最後に、矢野団長より、「我が国としては、和平プロセス進展に向けたスリランカ政府の努力が実るよう、引き続き応援を惜しまないつもりである」旨述べたところ、同大臣より、「我々は、日本を国際社会の中の最大の友人として見ているので、引き続き支援をお願いしたい」との発言があった。

## 六　ウィクラマナヤケ首相との会談

時そあめ
い。で務め
若た鎮度二
し重去
た属
は
、
相所き過
首にても
ケPえ相
ヤF支首
ナLを
マSPし、
ラてF任
ィクを経L歴
ウ線てSを臣
リ・戦し大
シ統一貫の
ナ民、多く
ト人は数る。
ラに後。い
代のるて

員を
議後、に一
遣たDAよりとなで、っ相をとが支
派述べOD後するは味に戻首民にカの道、多係しくいる物日力言リ明るためいた
両をのば削なし、日本に同国カン額水援が関移いにおあ博の協らスたてし交
遣ば今減くた日た。び国ンラ多支国間推てにで立く、かく早おりたてをし手
議ODよるは味に戻首民にカの道、多係しくいる物日力言リ明るためいた
議たDよるは味に戻首民にカの道、多係しくいる物日力言リ明るためいた
後Aりとなで、っ相をとが支
後すて意本に同国カン額水援が関移いにおあ博の協らスたてし交
て今減くた日た。び国ンラ多支国間推てにで立く、かく早おりたてをし手
ば削なし、日本に同国カン額水援が関移いにおあ博の協らスたてし交
ばかうし、べ府及びンラ多支国間推てにで立く、かく早おりたてをし手
れいそ察し述政リ、湾の二好続日予京国多り、点早おりたてをし交
れてけて、旨カスに港国。良継、る東化てのお観けてし交
ていりを視年に際国。貴るはがはすで文化てのだ考簡に手
いらでにおけて関秋に催まの思っ来る人往きる考簡に手
ないてりて道ンカ開日三ンカと人要にでいと書簡に手
れなしおした年展月ラたい思っ来る人往きる考簡に手
られてけて、おけて関秋に催まの思っ来る人往きる考簡に手
ていりを視年に際国。貴るはがはすで文化てのだ

相府より書簡が大使館に到着したので、右書簡は矢野団長が受領した）。

矢野団長より、スリランカへの経済協力について、「本日午前に、マラダーナ短期工科大学を視察し、明日には血液銀行（スリランカ厚生保健省血液事業部（ＮＢＴＳ）の血液センター）を視察する予定であるが、日本の経済協力が効率良く、無駄なく実施されなくてはならないと思っている。したがって、是非とも、スリランカにおかれては、日本の支援が遅滞することのないよう心がけていただきたい。また、スリランカでは、日本の青年海外協力隊員が五十三名活動しているので、何かの機会をとらえて、是非、閣下がこれら隊員と意見交換、激励するような機会を作っていただければ幸いである」旨述べた。同首相より、「そのような機会を是非とも設けたい。青年海外協力隊員のリストを首相府に送付してほしい」との回答があった。

矢野団長より、ＯＤＡ特別委員会の閉会中の審議について、「先刻、ボーゴラガマ外務大臣とのの会談の際にも申し上げたことであるが、大統領のの訪日の機会に合わせて、自分としては、参議院のＯＤＡ特別委員会の閉会中の審議という形で、スリランカについてのＯＤＡについての審議をしたいと思っている。その際には、外務大臣等に右審議に出席していただきたいと思っている。そうすれば、スリランカに対するＯＤＡがいかにスリランカ国民に寄与しているか、効率的に用いられているかが日本国民にも広く理解していただけると思う」旨述べたところ、同首相も首肯した。

矢野団長より、スリランカの和平プロセスについて、「スリランカの和平問題については、閣下を始め様々な努力をされていると承知するが、強硬派、穏健派等様々な関係者が存在することに加え、民族問題には長い歴史もあるので、一朝一夕には解決できないということはわかるが、是非とも、現在進められているＡＰＲＣにおいて問題の最終的解決を図っていただきたい」旨強く述べたところ、同首相より、「和平プロセスについては、現在ＡＰＲＣプロセスにおいて問題の解決を図ろうと

確形況、政、けるリ制単セス体簡ロプ。
て、う状はるがなすするいるとい中有あるか得対スく。ＡＰＲＣったた。
ていうにするかい説にくいるＡＰがあっ
おるとのをはてを題なてあるこ旨の発言
にする党えでし党問としでＡＰＲＣプ
セス足い政考と存政族こ存のＡＰがあった。
ロセ満てるなこ共た民族こうもＡＰＲＣプ
プが得い激いがし。すがうろ、ＡＰがあった。
プ者はて過し皆こうる割ろの共ＡＰＲＣプ
同事持して難で、こい分民族いこもＡＰＲＣプ
当支加いか中、てを各るとこ存のＡＰＲＣプ
係の参つなのりっ国であるのと政ＡＰＲＣプ
る関数にかなり行、国であ旨族ＡＰＲＣプ
あ関数にかなり行、国であ旨族ＡＰＲＣプ
ある係の参つなのりっ国であるのと政ＡＰＲＣプ
。当支加いか中、てを各るとこ存のＡＰＲＣプ
同事持して難で、こい分民族いこもＡＰＲＣプ
プ者はて過し皆こうる割ろの共ＡＰＲＣプ
ロが得い激いがし。すがうろ、ＡＰＲＣプ
セ満てるなこ共た民族こ存のＡＰＲＣプ
ス足い政考と存政族こ存のＡＰＲＣプ
にする党えでし党問としでＡＰＲＣプ
おるとのをはてを題なてあるＡＰＲＣプ
いるとい中有あるか得対すスく。ＡＰＲＣプ
ていうにするかい説にくいるＡＰＲＣプ
て、う状はるがなすするＡＰＲＣプ
確形況、政、けるリ制単セ
ろン大ＲＣ方なうでてはの要がし、今のと」旨の発言があったＡＰＲＣプ
こセ、ＰＲり、いのし勢国必いがし、今のと」旨の発言があったＡＰＲＣプ
とーがＡＰ在でといと姿うるな機能している。ＡＰＲＣプ
るパのカな府本いげはく機能している。ＡＰＲＣプ
い百なる委あラなものカりとう ま能している。ＡＰＲＣプ
てにはあ限もリばと府ン作こは う ま能している。ＡＰＲＣプ
しかでで権党スれこ政ラをなス

矢野団長より、「閣下が中心となってプロセス内の強硬派をうまく説得されることを期待する。まさはたれ、ラと倍総理に対し、スリただきたい」旨述べ回ロこあ一ろ、安ド承ッ首相を示し「そのようにしたい」旨の答

なお、ウィクラマナヤケ首相との会談の後、日本ンナ大使公邸ンに地方政府・州評議会・プレマジャヤ副大臣ナ・育親日本人会会長等両大臣に対し、今回の訪問の目的ス臣教と志ーコ健大臣（ス談し、また懇談を行った。

矢野団長より両大臣に対し、今回の訪問の目的ス

がれリ心力つ、我がるカしす意見交換を行った。

ンタ日本と教育大臣ンラ及び風間議員は、プレマジャヤ

席上、郡司大臣ンラ及び風間議員は、プレマジャヤ

ンタ日本と教育大臣ンラ及び風間議員は、プレマジャヤ

## 七　ラージャパクサ大統領との会談

マヒンダ・ラージャパクサ大統領は二〇〇五年十一月、首相在職時に大統領選挙に出馬し、第五代大統領に当選した。同大統領は、野党のリーダーも務めた経験があり、また、人権活動に熱心に取り組んだ経験を持つ。

同大統領は強力なリーダーシップを発揮して、ＡＰＲＣの設置、ＡＰＲＣにおける民族問題解決のための権限委譲案のとりまとめなど、全力を挙げてスリランカ和平に向けた努力を行っている。

会談の冒頭、矢野団長は、「今回の訪問の目的は、我が国の経済協力が円滑かつ効果的に実施されているかどうかを確認するためのものであり、参議院を代表して、各党の国会対策委員長である、民主党の郡司議員、公明党の風間議員、自由民主党の自分が訪問した次第である。今朝、当地に到着し、明日午後には帰国する慌ただしい日程ではあるが、経済協力案件視察としては、本日午前にマラダーナ短期工科大学の視察を行い、明日午前は血液銀行を視察する予定である。また、政府要人との会談についても、ウィクラマナヤケ首相、ボーゴラガマ外務大臣、デ・シルバ保健大臣等との間で有意義な意見交換を実施したところである」旨述べた。同大統領より、「日本の支援には常々感謝している。日本は、一九五二年以降現在に至るまでスリランカに対する支援を継続していただいており、その結果、スリランカの道路、港湾等インフラの開発はなされたと言っても過言ではない。今後ともこのような心のこもった支援を期待している。また、和平の分野では、日本はスリランカの特殊性をしっかり理解いただいており、絶えずスリランカを応援してくれていることを心強く思っている」旨の発言があった。

矢野団長より、「閣下は今年中には訪日されると承知している。是非とも訪日される際には、安倍総理に対し、スリランカ和平プロセスのロードマップを示していただきたい。そうなれば、これまで我が国が実施してきた経済協力がいかに効率的であったかが国会内ばかりでなく、広く国民に

理解したスリランカ政府の努力に対し更なる支援を検討することもできるであろうし、今後も和平実現に向けたロードマップについては、我々が考える民族問題の最終案についても是非説明したい」旨の発言があった。

同大統領から、「（和平プロセスのように）そのようにできると思う。訪日の際には、ただいまの閉会中の審議について、「先ほどのボーゴラガマ外務大臣との会談の際にも申し上げたことであるが、閣下の訪日の機会に合わせて、自分としては、ＯＤＡ特別委員会のＯＤＡについての審議を行いたいと思っている。その際には是非、閣下よりお言葉を頂いた上で、ボーゴラガマ外務大臣等に、この審議に出席していただければ幸いである。そうすれば、スリランカに対するＯＤＡがいかにスリランカ国民に寄与しているか、効率的に用いられているかが日本国民にも広く理解していただけると思う」旨述べたところ、同大統領より、「よい考えである。そのようにアレンジいただきたい」との快諾が得られた。

その後、議員団は、ラージャパクサ大統領主催の懇談夕食会に招かれた。

## 八　ラージャパクサ大統領主催懇談夕食会

矢野団長はまず、我が国とスリランカの二国間関係における要人往来について、「ウィクラマナヤケ首相との会談の際に、同首相より、安倍総理のスリランカ訪問の招待状を頂いた。これを受けて、この派遣議員団三名で安倍総理に会い、今回のスリランカ訪問の成果の報告・説明とともに、同招待状を同総理に手交するつもりである」旨述べた。同大統領より、「そうした心遣いに感謝したい。日本の総理は長くスリランカを訪問していないので、是非ともよろしくお願いしたい」旨の発言があった。

次に、矢野団長より、スリランカの和平プロセスについて、「スリランカは多くの文化遺跡を有す

る分承カばにィかＥを分断すこと、歴代の政府は、三十年近くにわたり、ＬＴＴＥに対して和平提案を提示してきたが、ＬＴＴＥはこれを無視してきた。また、彼等は非常に巧妙なプロパガンダを仕掛けてきており、これに対応するのも大変である。しかしながら、我々政府は、ＬＴＴＥが支配している地域に対し、医師、教師、技術者を派遣し、それぞれの仕事に従事させている。また、必要な物資も送り届けている」旨の発言があった。

矢野団長より、「スリランカのタミル人の十五パーセントはＬＴＴＥであるという印象が、国際社会では一般に持たれているが、自分は、タミル人の中にはＬＴＴＥのように暴力によって物事の解決を図るのは間違いであると認識している穏健なタミル人勢力が存在すると理解している。こうした勢力を取り込んでいくことが政府にとって必要であろう」と指摘した。これに対し、同大統領は、「矢野団長の言われるとおりである。タミル人の五十％以上は南部地域で通常の生活をしており、彼等はシンハラ、ムスリムと仲良くやっている」旨の発言があった。

さらに、矢野団長より、「ＬＴＴＥ支配地域内でＬＴＴＥに反対する勢力は育っていないのか」との質問をしたところ、同大統領より、「反対する者はいるだろうが、そうした動きはない。しかしながら、ＬＴＴＥ支配地域から南部に逃れてくるタミル人は多く、彼等はＬＴＴＥがいかにひどいことをしているか我々に語っている」旨の回答が

観光客ンれと言テしＴＴ国まれこ言リテ
ラなるこ言ノリ
ス平ばれ発ノ
リ和れ言ノ
ン平ばれ言ノ
ラ平れ言ノ
ンカ国
ンカ国
ンカ国

なされた。矢野団長より、「ＡＰＲＣにおいて近々、最終案がまとまると承知しているが、その見通しはいかがか」とただしたところ、同大統領より、「あと一週間以内には最終提案をまとめたいと思っているが、ＡＰＲＣには十三の政党が参加しており、そもそもＡＰＲＣとは南部政党のコンセンサスをまとめることが必要であるので、参加政党をできるだけ、ＡＰＲＣプロセスにとどめておく必要があるが、一つの政党が脱退すると言い出せば、そうさせないようにするのに時間がかかっているという状況である。また、ＡＰＲＣはこれまでに四十回以上協議を実施してきているが、参加政党の中には突然これまで主張してきた意見を百八十度変えるという政党もあり、調整にはやはり時間がかかる。これまでの協議によって、争点は三つか四つに絞られてきているので、何とか早期に合意にたどり着きたいと思っている」との希望が述べられた。

また、矢野団長は、「ウィクラマナヤケ首相とのの会談の際にも、同首相より、ＡＰＲＣプロセスにおいて、完全な合意は難しいが、多数派の意見をまとめ、プロセス内の強硬派を押さえたいとの発言があった」旨述べたところ、同大統領から、「ＡＰＲＣプロセスについては、ウィクラマナヤケ首相の言ったように進めていくつもりである」旨の発言があった。

最後に、矢野団長より、「スリランカには政策的に違う様々な政党が存在するのであろうが、いずれにしても、民族問題の解決に向けて一致団結して頑張っていただきたい」旨の激励を行った。同大統領はこの激励に対し、「もちろんである。我々政府は民族問題をタミル人の意見を聞きながら解決したいと強く望んでいるし、その努力もしている」旨の発言があった。

## 九　モラゴダ観光大臣との会談

議員団は二十四日午前、ミリンダ・モラゴダ観光大臣を訪問した。

同大臣は、銀行の頭取を務めるなど、経済界で

活躍してきた。その経験を買われて、政府関係機関の特別アドバイザーに就くという経験を持つ経済に強い閣僚である。同大臣は、ＵＮＰ政権下で和平プロセスを担当していた。

冒頭、矢野団長より、郡司、風間両派遣議員の紹介の後、和平プロセスについて「今回久しぶりに閣下にお会いできてうれしく思っている。スリランカの和平プロセスの進展を願ってきたが、国内政治情勢の複雑化が和平プロセスを停滞させているように見受けられるのは残念なことである」旨述べた。同大臣より、「貴議員団のスリランカ訪問を心より歓迎申し上げる。御指摘のとおり和平プロセスは停滞しており、その背景には、和平プロセスが開始されたために国内政治情勢が複雑化してきたという事情もある。当国の有権者の間では、以前よりも強硬派が台頭し、民族主義者の反動が生じている。現在ＪＶＰ及びＪＨＵ（ジャーティカ・ヘラ・ウルマヤ（シンハラ民族の遺産党））という二つの民族主義政党が、和平プロセスの速度を下げるべきであると主張している。紛争の政治的解決のためには、常に南部政党間のコンセンサスが必要であるが、そのようなコンセンサスの形成は非常に難しい。国際社会、特に西欧諸国は南部社会の複雑さを過小評価する傾向があり、紛争解決が単に南と北との話し合いの問題ではなく、南部政党間の対話を必要とするという点を見落としがちである」との指摘があった。

矢野団長より、「そのような複雑な事情の下で、ラージャパクサ大統領も困難な状況に置かれているものとお察しする次第である」旨述べたところ、同大臣より、「ラージャパクサ大統領は、強硬派と穏健派の双方からの圧力を受けており、何とかして対立する意見の間の均衡点を探さなければならないという困難に面している。均衡点が見いだされない限り、与党は国会で過半数を失うことになるであろう」との発言があった。

矢野団長より、「今回、ラージャパクサ大統領と夕食を共にして、和平に向けた大統領の力強いリーダーシップを感じた。同大統領は十二月中旬に訪日の予定であり、自分より、訪日の際には是

非、和平への具体的なロードマップを安倍総理にンン
明確に示していただきたい、これは日・スリラミ
カグ友好関係の更なる強化のための絶好のタイミ
グでと申し上げた。現在、大統領率いるで与党
側と、野党側との対立が強まっているようあ
が、閣下のことが心配になり、会食の際に大統領
に聞いてみたところ、大統領は、閣下がタミル側
との対話に熱心に関与しており、大統領にすばら
しいサポートを提供してくれていると述べてい
た」旨伝えたところ、同大臣より、「そのようにコ
メントいただけるとはありがたいことである。南
部の利害対立を均衡させることは困難な課題で
る指導者たちよりも南部シンハラ住民の信頼を
いるという強みを持っている。もし、大統領が
争の解決方法を見いだせば、必ず南部の支持を
られるであろう。ただし、多くの国民は、国の
裂につながるようなリベラル過ぎる解決法を
ているので、大統領の提示する解決案であれば
のに分裂には至らないであろうという安心感を
ＳＬＦＰとＵＮＰの間の与野党関係が良い状態
は状態は歴史的には珍しいことではなく、当国
いつも、時の野党が時の与党の足を引っ張る
う構図が繰り返されてきた。一般国民の誰も
大政党間の協力を望んでおり、国際社会も
ば二大政党間の協力を促しているが、いま
関係は実現していない。結局のところ、国民
のが分裂が国会に反映されているのであり、
ら和平に近道はないと言わざるを得ない。
現一年末のＵＮＰ政権成立時も、与野党
権しなかった。当時はまだ一般国民が、
きておらず、ＵＮＰは、当時国民が受け
範囲を大分超える和平合意をＬＴＴＥと
ん挙における敗北につながった」旨の
がある、また同大臣より、「既に述べた
な状況の中で、当国の和平プロセスを

ために、日本の支援は極めて重要であり、これまでに矢野団長からいただいた数々の支援にも感謝している」旨述べた。

次に、矢野団長は、ＯＤＡ特別委員会の閉会中の審議について、「閣下はＵＮＰ政権時代から、このほか平和構築に尽力され、スポーツを通じた民族和解の推進などの企画を実施されたことが強く印象に残っている。ＡＰＲＣにおける議論については、この一週間以内には合意に至ると見られるケ首相からラージャパクサ大統領及びウィクラマナヤも旨を伺った。確かに和平には近道はないかもしれないが、今日までの経緯からも、また大統領のリーダーシップと努力もあるので、和平の実現を強く願っている。我々参議院としても、スリランカ和平に対する国会の関心を高めてもらうためにも、十二月の同大統領訪日の際、国会閉会中ではあるがＯＤＡ特別委員会を開会し、ボーゴラガマ外務大臣との意見交換を行ってはどうかと考えている。国会の関心を高めることが国民の関心を高めることにつながるので、大統領にもその旨の話をさせていただいた」旨を伝えたところ、同大臣より、「日本との特別な関係はスリランカにとって非常に重要である。我々スリランカは国際社会からの多くの圧力に直面している。善意は重要ではあるが、善意をいかすためにも、国際社会にはよりよく正しく現状を知っていただきたい」旨の発言があった。矢野団長より、「スリランカに対する我が国の国民的関心が高まり、我が国を始めとする外国の関心が高まることで、平和構築のための体制が強化されるようにしていきたいというのが我々の希望である」旨述べたところ、同大臣より、「矢野団長にはすでに平和構築のために多くの支援をいただいているが、今後ともよろしくお願いしたい」との発言があった。

また、矢野団長より二国間関係等について、「我々はスリランカへの日本人観光客誘致に貢献したいと考えているが、街角に兵士が銃を持って立っている現状では、一般の観光客は恐怖感を抱いてしまう。そういう意味でも、早く和平を実現していただきたいと強く希望する次第である」旨

述べたところ、同大臣より、「矢野団長の述べられたことは重要な指摘であり銘記したい。人々の交流は和平促進のために重要である。自分は日本の歴史について限られた知識しか持ち合わせていないが、スリランカの和平を実現するためには、戦国時代に例えるならば信長のリーダーシップ、秀吉の説得力、そして家康の忍耐強さのすべてが必要である。日本とスリランカの歴史には多くの興味深い共通点があり、学ぶところが多い」旨述べた。

矢野団長より、「国民の痛みを思うと一時の猶予も許されない。是非早期に和平を実現していただきたい。また訪日される機会があるのならば、是非教えてほしい」旨伝えたところ、同大臣より、「自分は大統領と協議の上、近々訪日したいと考えている。矢野団長の御都合のよい時にお会いしたい」旨の発言があった。矢野団長より、「日本でお会いできることを楽しみにお待ちすることとしたい」旨述べた。

同大臣より、「スリランカの和平プロセスに対しては、時にフラストレーションを感ずることもあるかと思われるが、是非スリランカへの関心を失わないでいただきたい。スリランカは小国であり、当国が立ちゆくためには他国に関心を持ってもらうことが必要不可欠である」旨の発言があり、矢野団長より、「その意味では、今回郡司議員及び風間議員が当国を訪問したことは、参議院を挙げてスリランカの和平を支援する用意があるということを示すことができたという点で重要なことである」旨述べた。

郡司議員より、「最近我が国においてインカ文化展が開催された後、ペルーを訪問する邦人観光客が増え、特にマチュピチュ遺跡が希望訪問先のトップを占めるようになっている。スリランカも来年秋にスリランカ文化遺産展を実施予定であると聞いており、これが成功裏に実施されれば、スリランカを訪問したいと思う邦人が大幅に増えるであろう。閣下が訪日してビジット・スリランカ・キャンペーンを実施すれば大きな効果があり、遺産展に向けた準備の好機になると思われる」旨述

べたところ、同大臣より、「当国観光業の発展のため、ＪＢＩＣ（国際協力銀行）からも多大な支援を得ており、訪日日程の調整にも協力いただいている」旨の発言があった。

矢野団長より、「我々三名で閣下の訪日をお待ちしている」旨述べたところ、同大臣より、「今回貴議員団が超党派でスリランカを訪問されたことは、我々スリランカにとって大変良いことであった。なぜなら、日本の内政上の変化が、日・スリランカ関係にも影響を及ぼすのではないかと懸念する人々が当国政府内にも存在していたからである。今回の御訪問を通じて、我々二国間の長い友好の伝統を再確認することができた。今後、ラージャパクサ大統領の訪日に向けても、二国間関係をますます発展させていけるよう努めたい」旨の発言があり、矢野団長より、「是非スリランカとの伝統ある友好関係を維持・強化していきたい」旨述べた。

十　国立血液銀行視察

議員団は、R・ビンドゥサーラ代表らの案内で、スリランカ厚生保健省血液事業部（ＮＢＴＳ）の管轄の下にある血液センター及び同センターの血液供給システムの基盤整備事業を視察した。スリランカでは中央政府と州に、血液銀行と通称される機関があり、この血液センターもその血液銀行の施設である。

この施設建設等のための借款額は、約十五億円である。この血液供給システムの施設ができたことにより、スリランカの保健医療水準は向上し、しかも州の血液銀行への機材供与、職員への研修・トレーニング、事業実施監理のためのコンサルティング・サービスを行えることとなった。また、同施設における訓練・教育により、感染症対策に資することも期待されている。

同施設において、同代表から当該事業の概要、スリランカの保健・医療の事情、血液供給システム等について説明を聴取した。

最後に、矢野団長から、「皆様の御説明をお聞

きし、我が国のＯＤＡが貴国へ貢献していることがわかり、感銘を受けた」とのあいさつがあった。

十一　コロンボ国際空港改善事業の概況説明聴取

最後にコロンボ国際空港（正式名称は「バンダラナイケ国際空港」）において、同空港改善事業の概要説明を実施責任者のＳ・ラフィーク氏から聴取した。

同空港改善事業は、一九九九年にＪＢＩＣと契約が結ばれており、百二十三億八千四百万円の円借款事業である。同事業の工事は、二〇〇三年から工事に着工し、昨年八月に竣工した。二〇〇六年の輸送実績である輸送旅客数四百八十万人、輸送貨物量十七万トンは、この改善事業により、輸送旅客数六百万人（二十五パーセント増）、輸送貨物量三十二万トン（約八十八パーセント増）に増大することが期待されている。

十二　終わりに

以上が今回の本議員団の報告である。本議員団は、今回の会談及び視察を通して、我が国のＯＤＡが、スリランカの経済・社会の発展に寄与していること、ＯＤＡ大綱の重点課題である「平和構築」の趣旨に沿ったものであること、また、スリランカ政府及び国民から感謝されていることを実感できた。

また、ラージャパクサ大統領、ウィクラマナヤケ首相及び閣僚との会談を通して、同大統領以下政府首脳は、打ち続くテロ事件や政党間対立等の幾多の困難にも屈せず、ＡＰＲＣで権限委譲案をまとめつつあるなど、スリランカ和平実現のために最大限の努力を行っていることも十分理解できた。

のみならず、本議員団は同大統領以下閣僚に対し、本院がスリランカの和平に大いに関心を持つため、ＯＤＡ特別委員会での意見交換を行いたい希望を述べ、また、同大統領に対し訪日日程に合わせて、和平プロセスに関するロードマップを示

す
よ
う
強
く
主
張
した
ところである。
最
後
に、今回の調査に
お
い
ては限られた日程の
中
で、ラ
ジ
ャ
パ
ク
サ
大
統
領
が
行
わ
れ
た。
い
ず
れ
も
政
府
の
枢
要
な
職
員
と
の
会
談
で、真
摯
に、時
と
し
て
機
終
始
和
や
か
な
雰
囲
気
の
中
で
す
る
こ
と
が
で
き
た。
微
に
触
れ
る
意
見
交
換
を
に
応
じ
て
く
だ
さ
っ
た
方
々、
多
忙
な
中、快
く
会
談
説
明
を
し
て
く
だ
さ
っ
た
視
察
先
に
お
い
て
懇
切
丁
寧
な
お
取
り
い
た
だ
い
た
在
ス
リ
ン
カ
日
本
大
使
館
並
び
に
経
由
地
に
お
け
る
在
外
公
館
方
々
に
改
め
て
感
謝
申
し
上
げ
る
次
第
で
ある。
ラ
の
方